

二 本 木 遺 跡

—第30次発掘調査概要報告—

平成26（2014）年3月
久留米市教育委員会

二 本 木 遺 跡

—第30次発掘調査概要報告—

平成26（2014）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、耳納山地の緑、筑後川の水など豊かな自然に恵まれています。このような環境のもと、先人達は多くの文化を創造し、市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。

本書で報告する二本木遺跡は、現在の市立南筑高等学校付近に平安時代後期、筑後国府IV期政庁が移転したことを契機として発展を遂げ、国府が衰退した後も高良山の鳥居前集落として栄えた府中の一角を占める集落遺跡です。今回の宅地造成に先立つ調査でも、平安・鎌倉時代を主体とした多くの遺構・遺物が確認され、当地における筑後国府IV期政庁の繁栄を再認識することとなりました。今回の発掘調査の成果によって、久留米の歴史の解明や文化財保護の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご理解のもとにご協力をいたしました、九州セキスイハイム不動産株式会社様や関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会

教育長 堤 正則

例　言

1. 本書は、宅地造成に先立ち九州セキスイハイム不動産株式会社の委託を受けて実施した、二本木遺跡第30次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久・西拓巳・小川原勲が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、西と小川原・大渕文子・桝島ミドリ・中野ゆみ・山田治代が行った。また図面の浄書は、専任非常勤職員の古賀和子・丸山裕見子が行った。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤ RB67 を用いて西が、マミヤ RZ67 を用いて小川原が撮影した。
5. 遺構実測図は国土調査法第II座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、S B—掘立柱建物、S D—溝、S K—土坑を示す。
7. 本調査に關わる出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管される予定である。
8. 本調査の略記号は NHG-030、調査番号は 201313 である。
9. 本書の執筆・編集は、神保・西の指導のもと小川原が行った。

本文目次

I.	はじめに	1
II.	位置と環境	2
III.	調査の記録	4
IV.	総括	12

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造道路成に伴う事前の発掘調査である。平成 23 年 9 月 5 日、土地所有者から、久留米市御井町 1612-1、1612-3、1612-5、1613-2、1614 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地である二本木遺跡内にあたり、平成 23 年 9 月 13 日に確認調査を行った。その結果、対象地において遺物や遺構が確認されたため、造成地内の道路建設予定地について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担として発掘調査が行われる運びとなった。平成 25 年 5 月 9 日に九州セキスイハイム不動産株式会社（代表取締役社長黒木和清）から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成 25 年 6 月 3 日に同社と久留米市長檜原利則は「二本木遺跡第 30 次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。平成 25 年 7 月 22 日に現地調査を開始した。攪乱の影響を受けて遺構の残存状況が悪い部分もあったが、中世を中心とした遺構、遺物が多数確認された。現地調査は平成 25 年 10 月 23 日に終了した。

2. 調査の体制

調査委託：九州セキスイハイム不動産株式会社

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部長：野田 秀樹

次長：佐藤 光義

文化財保護課 課長：園井 正隆

課長補佐兼主査：宮崎 俊一 白木 守

事務主査：塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：神保 公久 西 拓巳 小川原 励

整理担当：古賀 和子 丸山裕見子

発掘調査臨時職員

秋永 絹子・牛嶋 一男・氏福 正輝・大谷恵美子・大坪 進・大渕 文子・樋島ミドリ

川原 初美・國武 三歳・古賀 勝治・櫻木 沙織・佐藤 朱美・高尾 幹幸・高倉 直人

田中とし子・堤 淳子・中野 ゆみ・平山 翔太・溝口 輝男・森山美千代・山田 治代

(50 音順)

発掘調査整理臨時職員

古賀 啓子・古賀 貴子

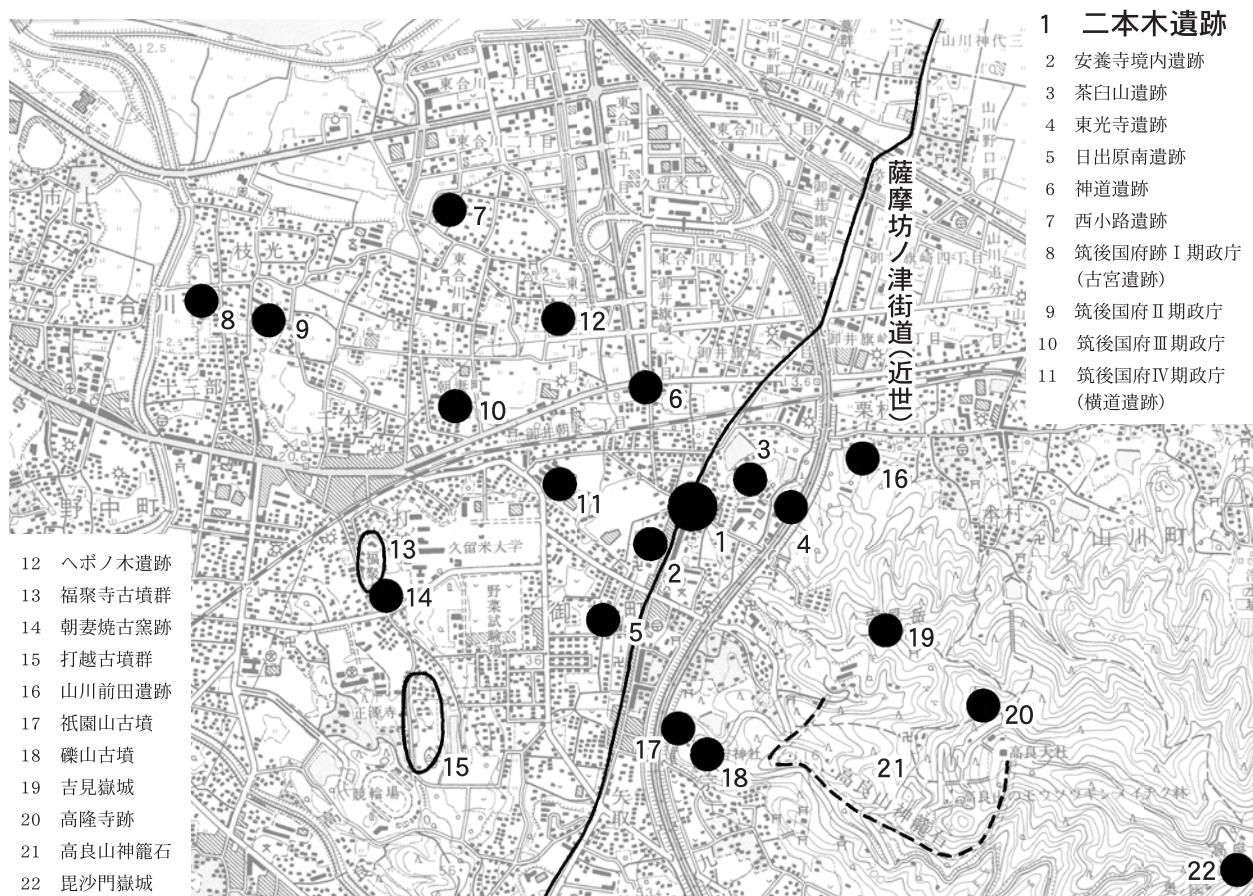
II. 位置と環境

二本木遺跡の所在する御井町は久留米市街地の東部に位置し、耳納連山西端に聳える高良山（標高 312m）の西麓に現在の集落が展開する。遺跡は高良山から西へ派生する標高 27~32m の丘陵上に位置する。耳納連山北麓には活断層である水縄断層が走っており、その断層活動によって形成された断層崖下には随所に湧水がみられるほか、高良山麓には高良三泉と称される「朝妻・岩井・徳間の清水」が湧出する。こうした豊富な湧水に恵まれた環境の下、周辺には縄文時代から近世に至る様々な性格の遺跡が営まれ、市内でも最も遺跡が集中する地域の 1 つとなっている。

縄文時代には、横道遺跡で筑後地域において最古段階に位置付けられる草創期の隆起線文土器や続円孔文土器をはじめ、幅広い時期の遺物が出土し、早期の集石遺構や焼土遺構も検出されている。また神道遺跡、西小路遺跡では晩期の竪穴建物が確認され、当地で集落が形成されていたことが明らかになっている。

弥生時代では二本木遺跡の北部分において、幅5m以上、総延長120m以上にも及ぶ大溝が確認されており、底面からは丹塗り土器をはじめとする中期の土器が多く出土する。この大溝の西側においては竪穴建物や土坑などで構成される居住域が展開しているものの、東側においては該期の遺構は皆無であり、居住域を画する溝であると考えられる。

古墳時代には、箱式石棺を主体部とする市内最古の古墳である祇園山古墳（方墳）が築かれる。



第1図 二本木遺跡群周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

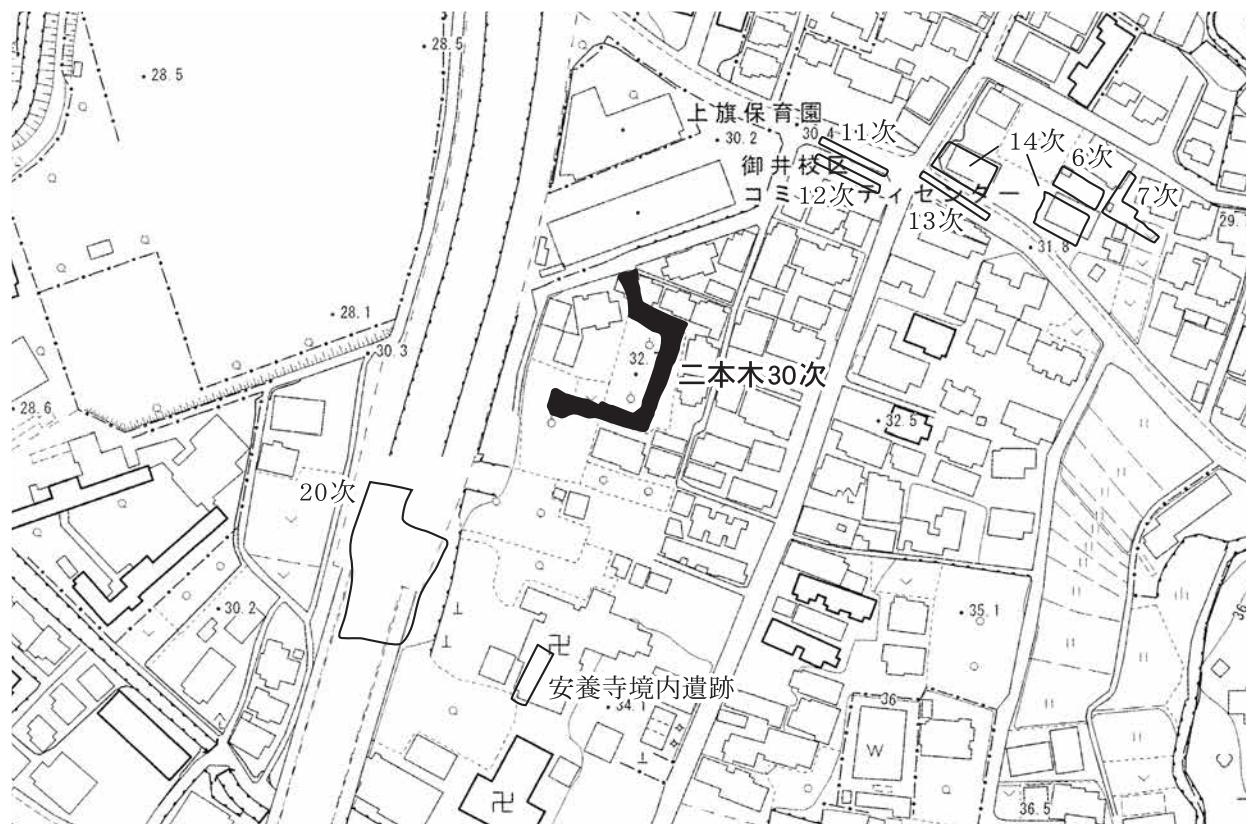
高良大社に伝わる三角縁神獸鏡は同古墳出土と云われるものであるが、考古学的確証はない。このほか祇園山古墳を見下ろす丘陵上には、岩盤を刳り抜いた盤棺を主体部とする礫山古墳、西方の打越丘陵上には福聚寺古墳群など、多くの古墳が存在する。

7世紀半ば頃には高良山南西側斜面に、標高250m地点を最高所として高良山神籠石が築かれた。7世紀末に筑紫国から分国した筑後国は10郡を管轄し、二本木遺跡が所在する御井町付近は「御井郡」に属する。神道遺跡、山川前田遺跡では、『日本書紀』に記載のある天武7年(679)の筑紫大地震の地割れ痕跡などが確認されている。

平安～鎌倉時代は二本木遺跡が最も盛行を迎える時期である。中世末頃の『高良玉垂宮神秘書(高良記)』には延久五年(1073)に筑後国府が「今ノ符」に移されたとあり、「今ノ符」は横道遺跡で検出された建物群に比定されている。ほぼ同時期に駅路が変更し、御井町を通過したと想定されており、安養寺境内遺跡、日出原南遺跡、茶臼山・東光寺遺跡などの周辺遺跡からも、中世の遺物が多く出土している。国府と駅路の移動を機に、高良山西麓一帯が著しい発展を遂げたことを示している。

南北朝時代から戦国期にかけて、軍事上重要な地形を有する高良山一帯には、延文四年(1359)の筑後川合戦時に南朝方の懷良親王の本城となったと伝えられる毘沙門嶽城や、天文二年(1533)に八尋式部によって築かれた吉見嶽城など、多くの山城が築かれる。

近世になると、駅路から発展した薩摩坊ノ津街道によって御井町の中心地は「府中宿」として大きな発展を遂げる。また福聚寺裏の隈山には、久留米藩の収入強化の一策として正徳四年(1714)に操業が開始された朝妻焼古窯跡が所在する。



第2図 周辺地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

III. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

調査対象地は二本木遺跡第 11・12 次調査地の南西約 70m、第 20 次調査地の北東約 100m、安養寺境内遺跡の北約 100m に位置する。二本木遺跡第 11・12 次調査では弥生時代の中期の大溝や 12 世紀前半の溝、12 世紀中～後半に比定される土坑などが検出されている。第 20 次調査では 13 世紀半ばから後半を主体とした土坑群や土壙墓などが検出され、8 枚の中世銭貨が土坑群から出土している。安養寺境内遺跡では 10 世紀前半の溝や土坑、13 世紀代の方形土坑や土坑、17～18 世紀の近世墓など 3 時期の遺構が主に検出されている。方形土坑は半地下式倉庫として利用されていたと考えられ、久留米市内では東合川町、御井町などの高良山西麓一帯に分布する。安養寺境内遺跡では狭い範囲内から 5 基確認された。

以上のような周辺の状況や確認調査の結果を踏まえ、中世における当地の生活の様子を明らかにすることを目的とし、調査を実施した。

平成 25 年 7 月 22 日に重機を搬入し、調査区南西側から表土剥ぎを開始した。調査区東側では南北 15m 以上にわたって遺構が確認されず、地山の状態が周囲と異なっていた。確認のため重機で 0.5 m 程掘削したが遺構は確認できず、近世以降に搅乱があったと考えられる。そのため、調査区の中ほどで表土剥ぎを一時止め、北側から表土剥ぎを行った。北側も一部で搅乱が確認され、一部は 0.5 m 程掘削した。23 日に表土剥ぎが終了し、遺構検出を開始した。検出が終了した部分から平板測量による略図作成 (S=1/50) を実施し、略図作成が終了した部分から遺構の掘り下げを開始。並行して遺構実測、写真撮影を随時行った。10 月 18 日に気球により全景写真を撮影した。10 月 22 日に埋め戻し作業に入り、最終的に調査が終了したのは 10 月 23 日である。

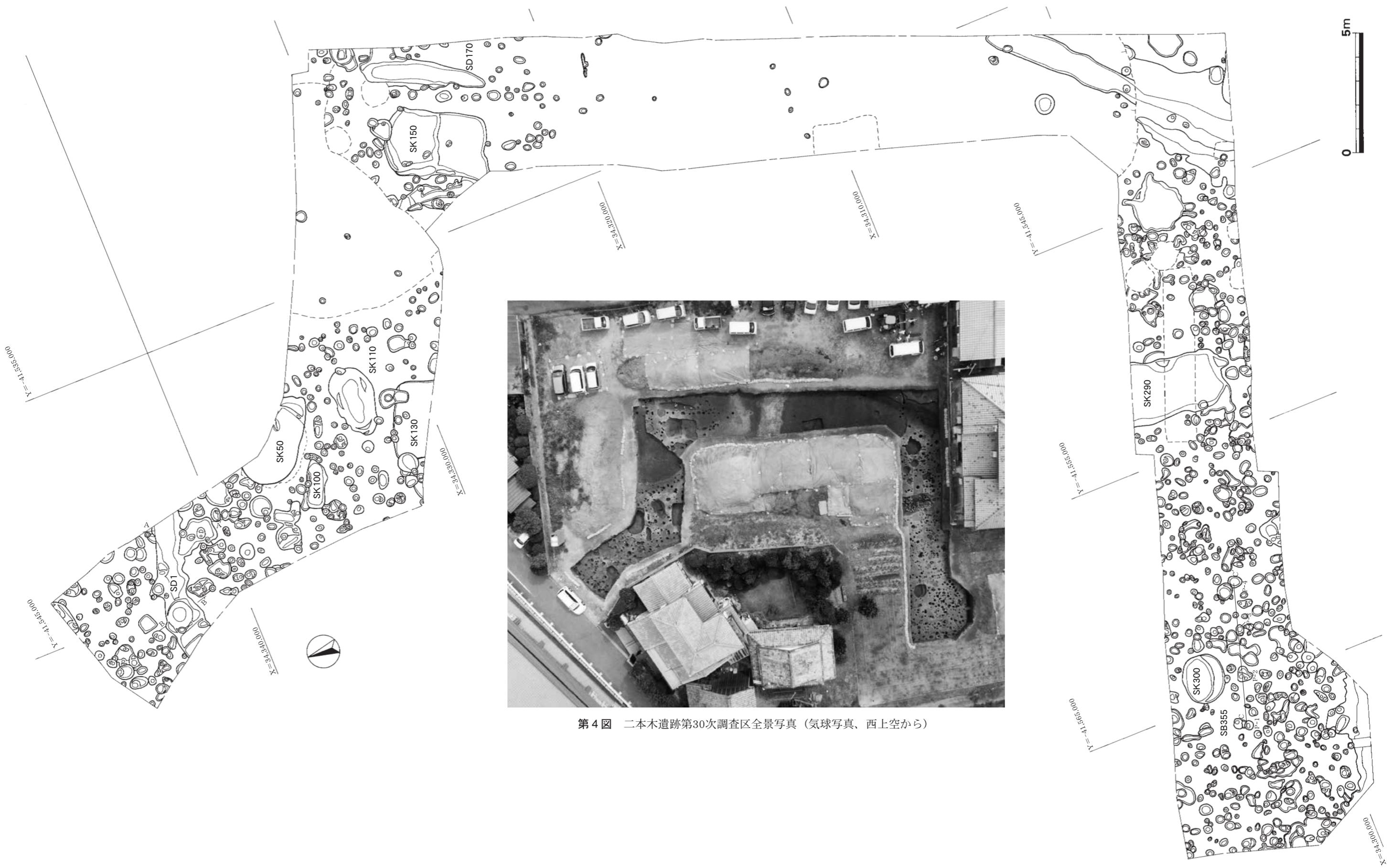
個別遺構・土層実測図 (S=1/10) は手測りで記録したが、それ以外の遺構実測は、トータルステーションを用いて行い、その記録は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん Cubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、空中写真をカラーリバーサル・モノクロームとともに(有)空中写真企画が 6×6 判で撮影し、その他を神保、西、小川原がカラーリバーサル・モノクローム 6×7 判で撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

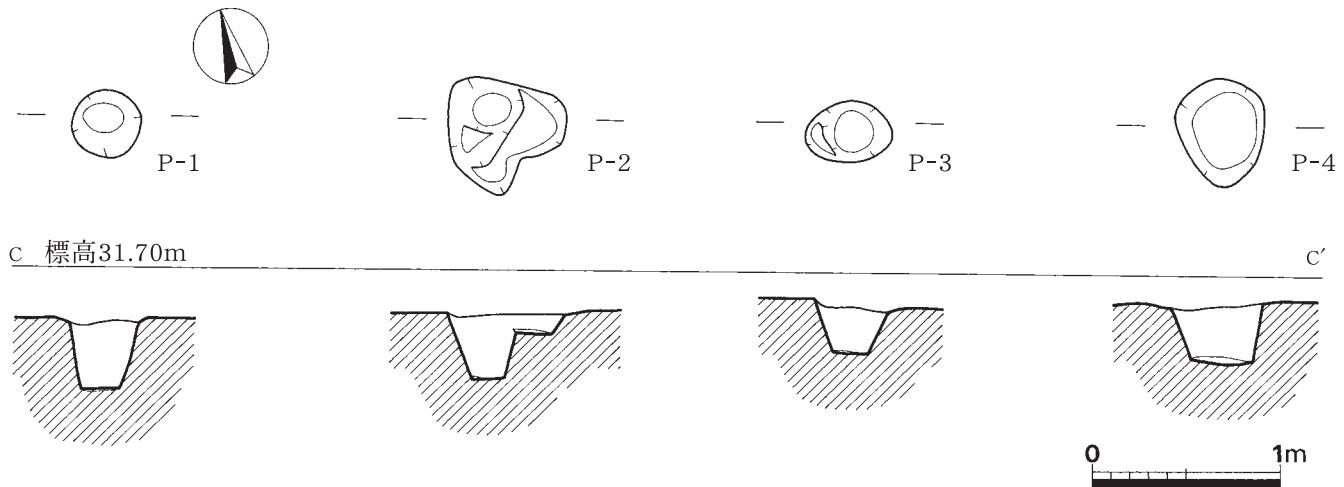
対象地は宅地と畠地として利用されていた。表土下 0.5m～0.9m で遺構検出面に達する。遺構検出面は南東側が高く北西側へ向かい緩やかに低くなる。調査区中央部分では南北約 15m にわたって遺構が検出されない範囲があり、検出面の様相から近世以降に搅乱があったと考えられる。しかし、その範囲以外の調査区北部分、南部分では多数の遺構、ピットが検出された。遺物は縄文土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、鉄器、石製品などがパンコンテナー 30 箱程度出土した。未整理であるが、12 世紀後半～14 世紀の遺物が出土し、わずかに縄文時代、古代の遺物が出土している。遺物の約 9 割が今回報告する遺構からの出土である。

今回は、概要報告として掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、土坑 7 基について報告する。

第3図 二本木遺跡第30次調査遺構配置図 (1/150)



第4図 二本木遺跡第30次調査区全景写真 (気球写真、西上空から)

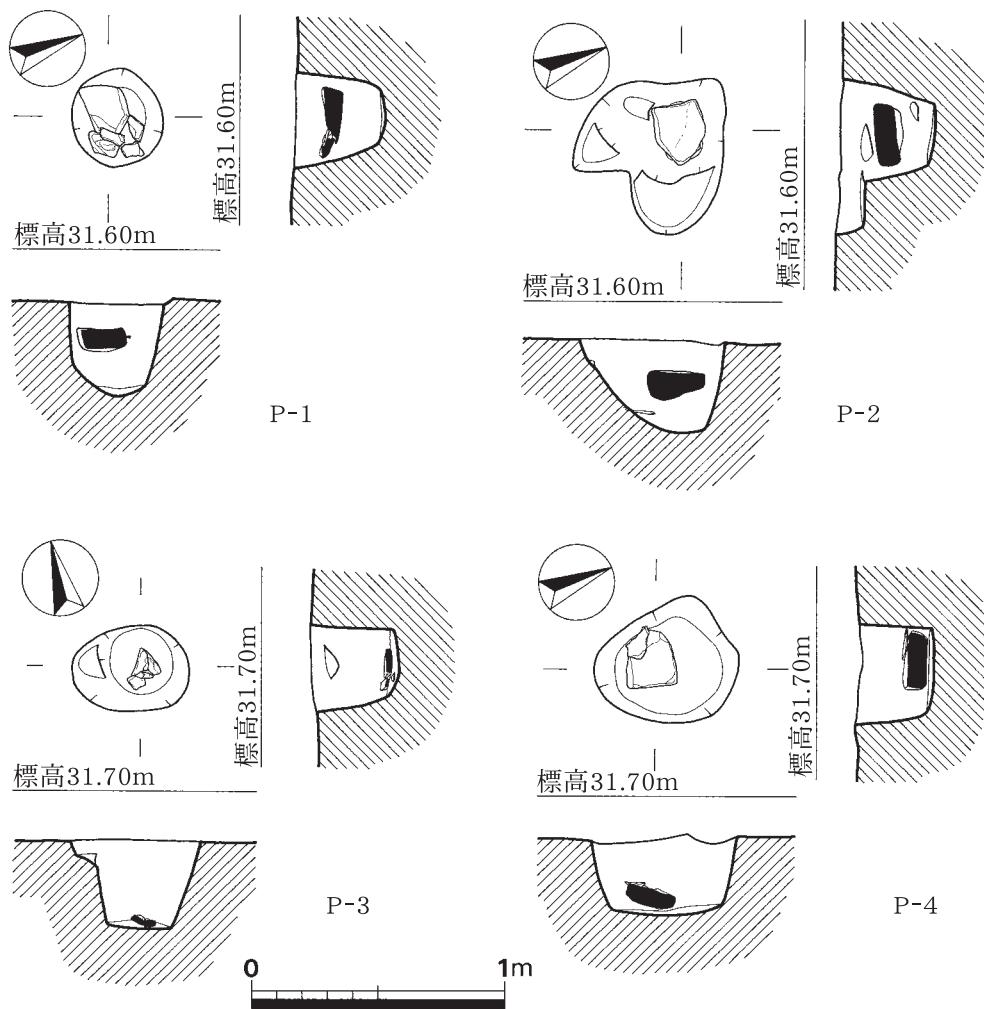


第5図 SB 355 実測図 (1/40)

掘立柱建物

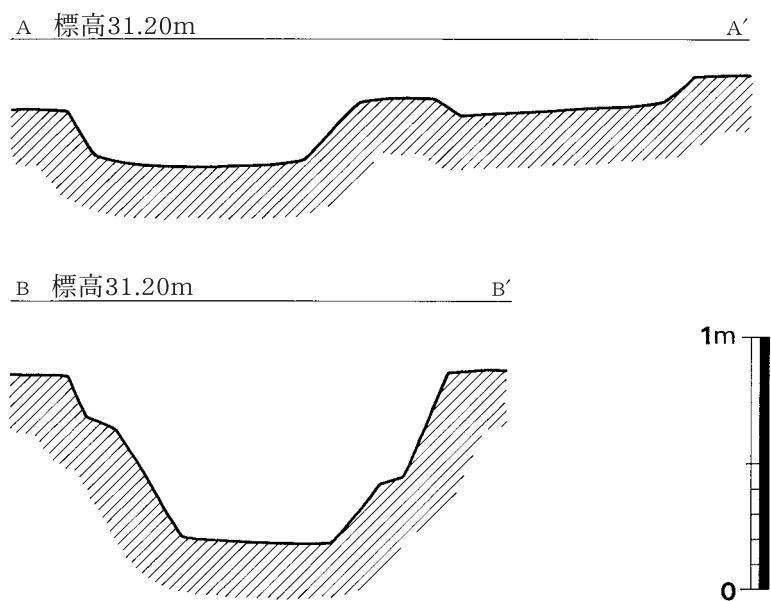
SB 355 (第5・6図、図版2)

調査区南東部で検出した石製礎板を有する柱穴である。礎板は0.2~0.3m大の片岩が用いられており、3間分が1列のみ確認されたため、柵の可能性も考えられたが、第14次調査の成果を踏まえ



第6図 SB 355 P-1・P-2・P-3・P-4 実測図 (1/30)

て掘立柱建物とした。周辺に礎石を有する遺構は確認できず、柱穴の掘方も一定でないため、建物が南北どちらに延びるか判断できなかった。柱間は2m前後で、柱穴の掘方は直径0.3~0.65mの円形、橢円形を呈する。深さは0.3~0.4mを測る。土師器の小皿・壺、輸入陶磁器などが出土している。



第7図 SD 1 断面図 (1/30)

溝

SD 1 (第7図、図版3)

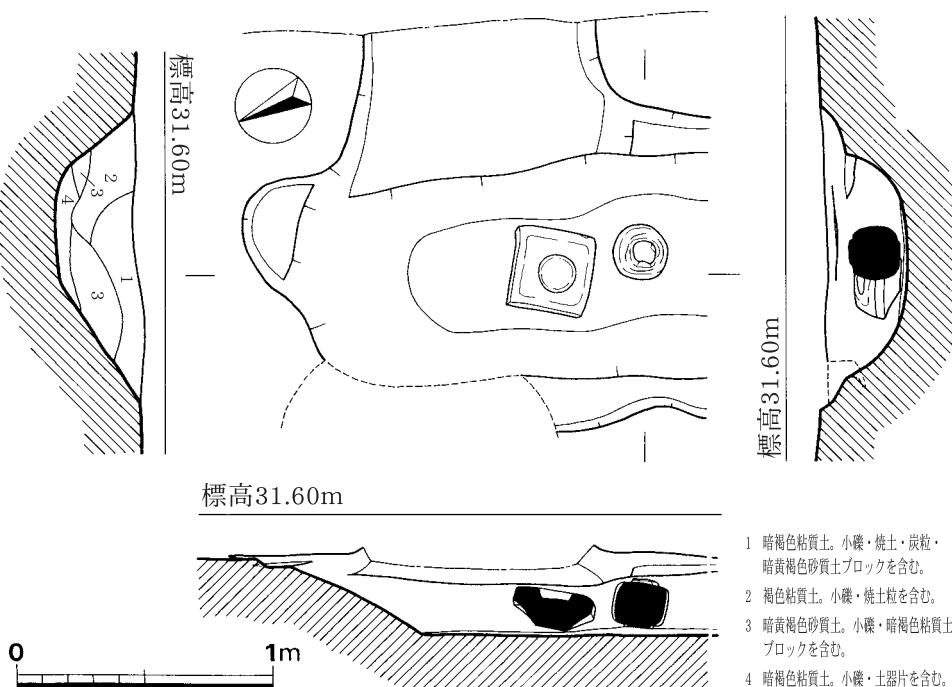
調査区北部で検出した東西方に走行する溝である。底面のレベルは東から西へ深さを増す。上端幅1.5m、深さ0.2mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。埋土は小礫混じりの青灰色砂質土で占められ、分層はできなかった。東部分には奥行1.8m、上端幅1m、深さ0.2mの突出部を持ち、西側には断面逆台形状で直径1.4m、深さ0.65mの円形土坑が重なる。円形土坑は溝と重複している別遺

構の可能性も考えたが、溝と土坑の位置関係や、溝の随所から土坑内と同時期の土師器小皿・壺が出土することから、円形土坑も溝の一部として扱った。土師器の小皿・壺、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。

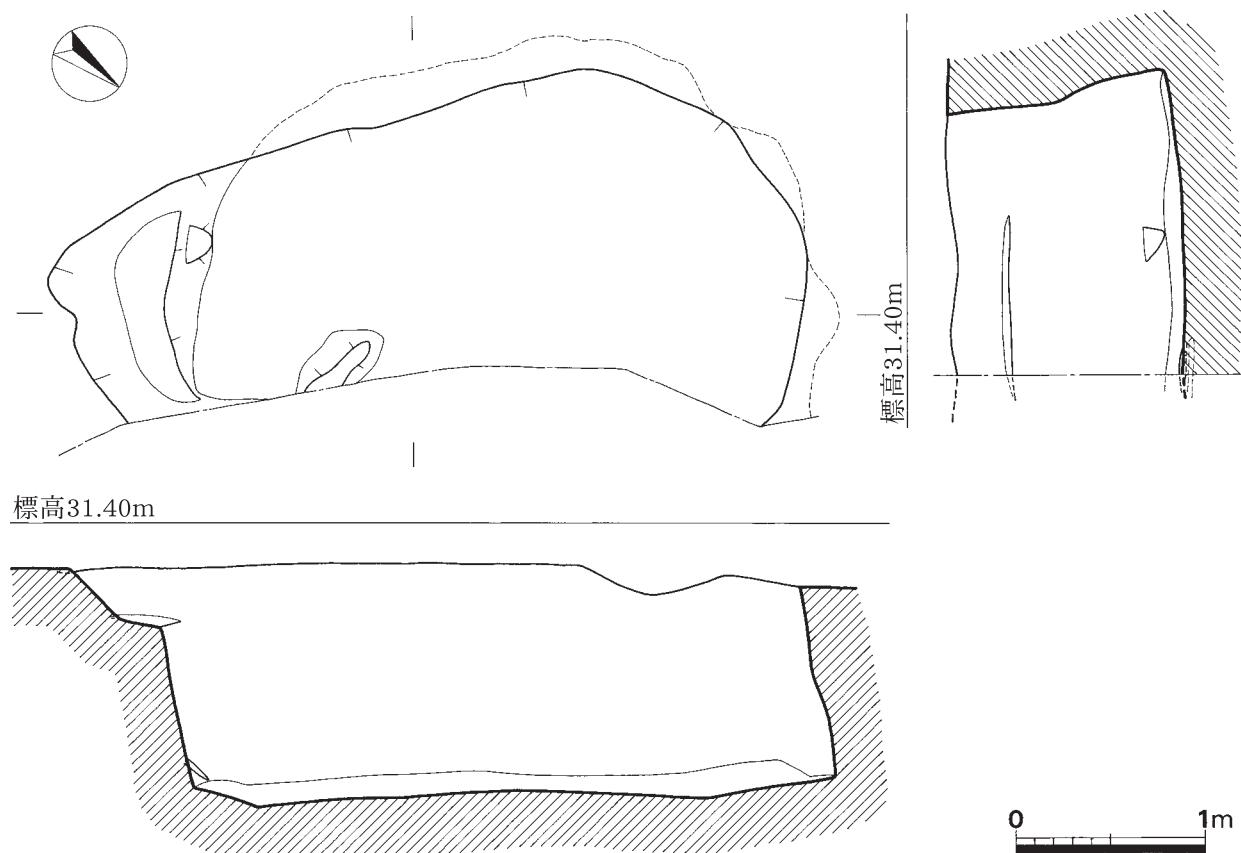
SD 170 (第8図、図版3)

調査区北東部で検出したSK 150と並行するように南北方向へ走行する溝である。北部分は東側へ直角に曲がり、調査区外へ延びている。南北長5.2m、上端幅1m、深さ0.35mを測る。断面は

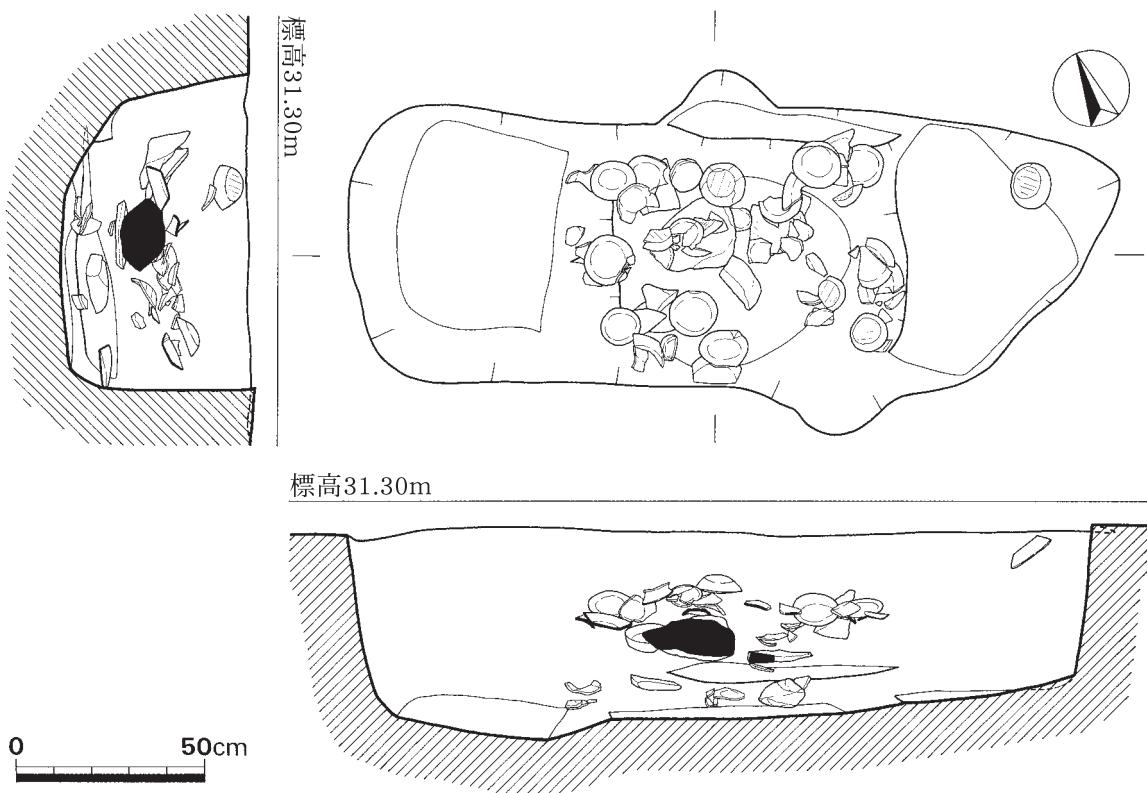
逆台形を呈する。上層には炭化物や焼土粒が含まれ、遺物は下層に集中する。北部分では五輪塔部材のうち、水輪、火輪が出土し、南部分では0.2~0.3m大の片岩製の礫が多数検出された。土師器の小皿・壺、土鍋、輸入陶磁器などが出土している。



第8図 SD 170 実測図 (1/30)



第9図 SK50 実測図 (1/40)



第10図 SK100 実測図 (1/20)

SK50 (第9図、図版3)

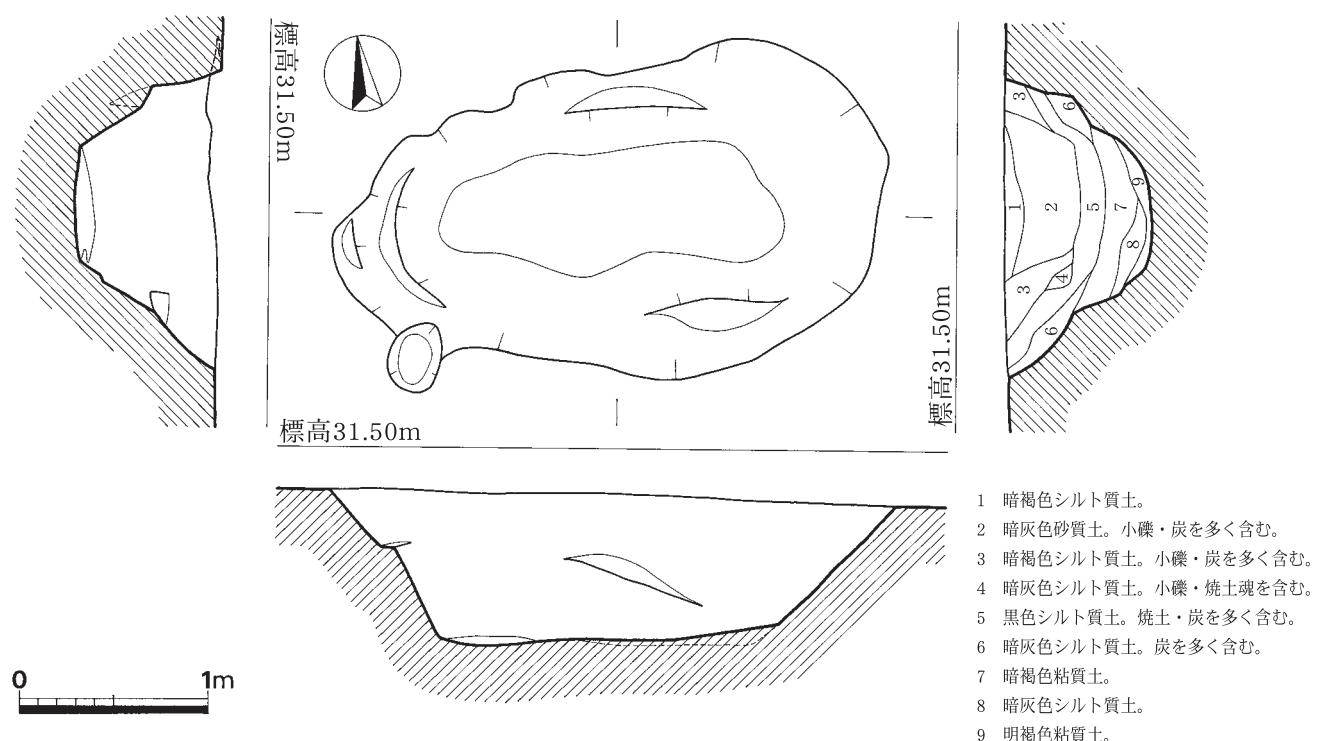
調査区北西部で検出した大型の土坑である。北側は調査区外に延びるが平面プランは橿円形を呈すると考えられ、長軸4m、短軸2m以上、深さ1.3mを測る。南東部分には、底面から0.85mの高さに段があり、底面は黄褐色土の地山でほぼ平坦である。北西側の壁下部はオーバーハングする傾向があり、鋤状の工具の痕跡も確認された。埋土は黄褐色土がわずかに含まれ、西部分では底部付近に地山と同様の砂層が堆積しており、壁の上部が崩落したものと考えられる。土師器小皿・壺、石鍋、輸入陶磁器などが出土している。

SK100 (第10図、図版3)

調査区の北西部で検出された土坑である。平面プランはいびつな橿円形であり、断面形状は逆台形である。長軸2m、短軸0.85m、深さ0.5mを測る。遺物が集中していたため土層図は作成できなかったが、遺構検出面から0.3mまで地山ブロックが混じる暗褐色砂質土、それ以下は暗灰色粘質土であった。土師器の小皿・壺が土坑中心部からまとまって出土した。形状から土壙墓とも考えられたが、完形の土器が少なく、割れた状態で投棄された遺物が多いことから廃棄土坑と思われる。土師器の小皿・杯の他に土鍋、瓦器、輸入陶磁器などが出土している。

SK110 (第11図、図版3)

調査区北西部、SK50とSK130の間で検出した土坑である。平面プランは橿円形で、断面はU字形を呈する。長軸3m、短軸1.7m、深さ0.5mを測る。平面では判別できなかったが、土層断面から埋没後に2度掘り直されていたことが分かる。土師器の小皿・壺、輸入陶磁器などが出土している。



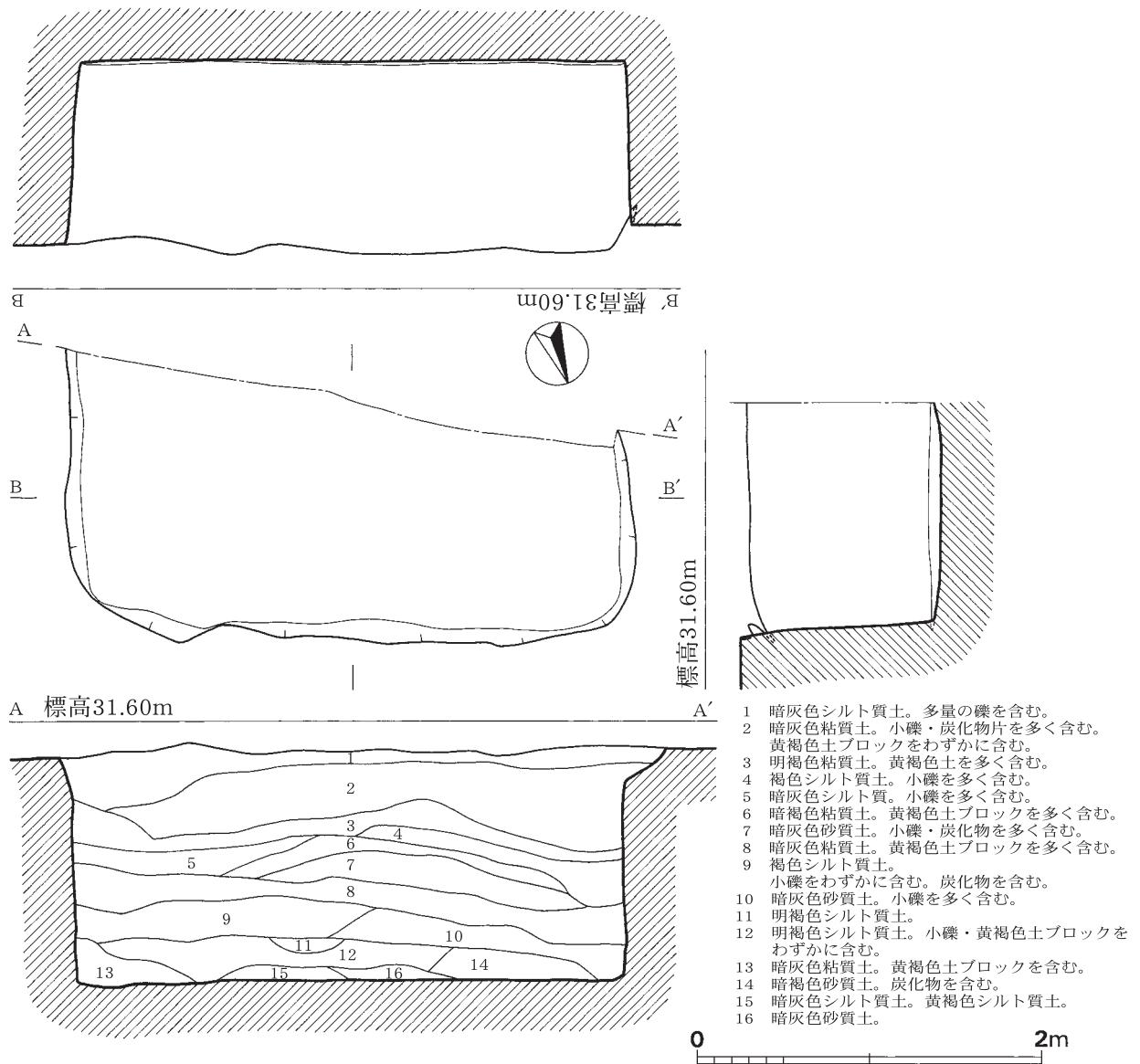
第11図 SK110 実測図 (1/40)

SK130 (第12図、図版4)

調査区北西部で検出した大型土坑である。南側が調査区外に延びるが、長さ3.3m、幅1.6m以上、深さ1.1mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈す。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦に整えている。埋土は黄褐色土ブロックを含む層と含まない層が交互に堆積している。土師器の小皿・壺、土鍋、輸入陶磁器などが出土している。

SK150 (第13図、図版4)

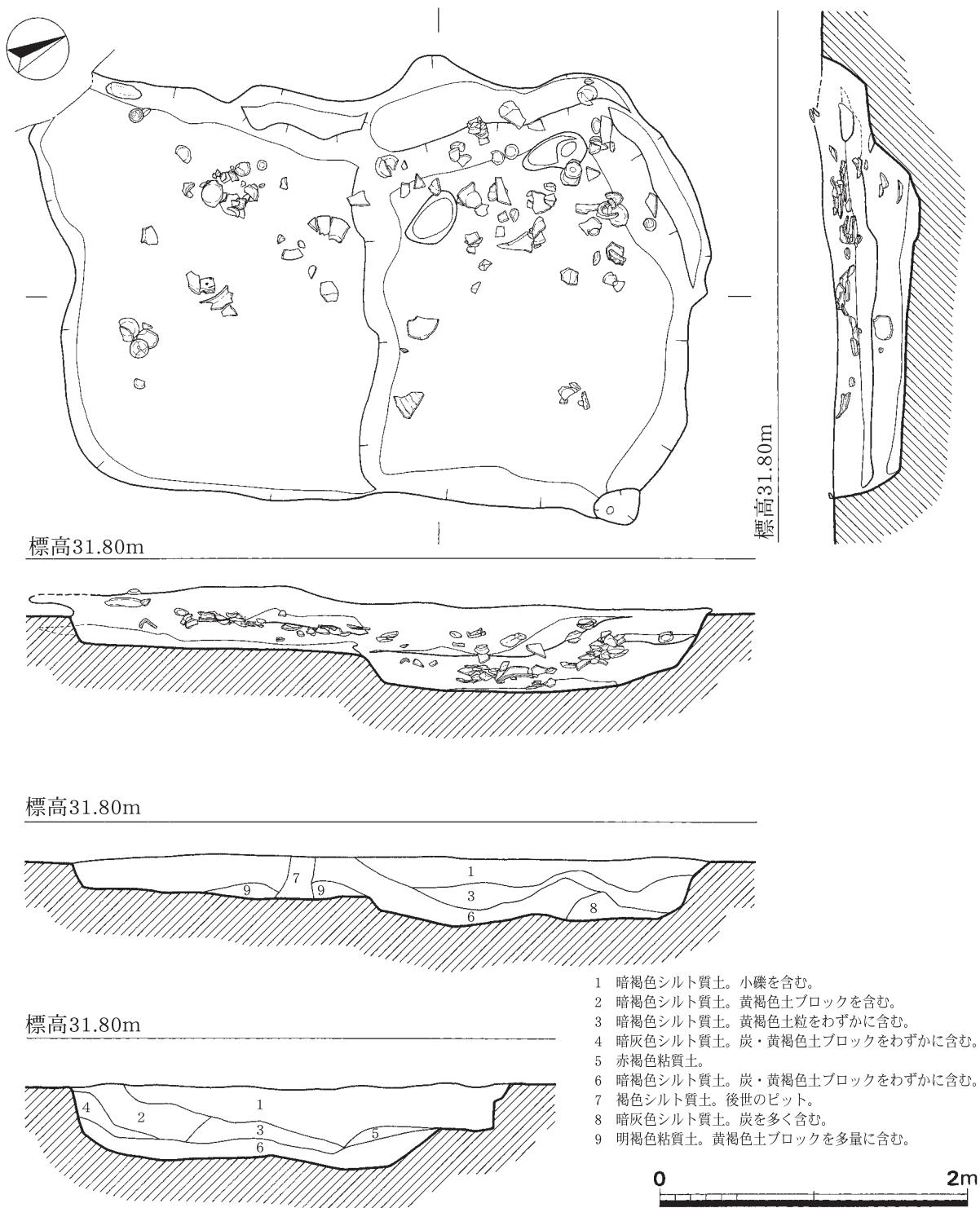
調査区北東部分で検出した土坑である。平面プランは長方形で、南北の中心付近で段差が認められ、北半部が1段低くなっている。長さ4.4m、幅2.6m、深さは中段まで0.3m、最深部まで0.45mを測る。SD170と並行しており、両遺構の関係が想定される。埋土中には炭化物や焼土粒が多く含まれていた。遺物は西側に集中しており、土師器の小皿・壺、須恵器、錢貨、輸入陶磁器などが出土している。同時期、同規模のSK290と比較して、須恵器、輸入陶磁器類が多い。



第12図 SK130 実測図 (1/40)

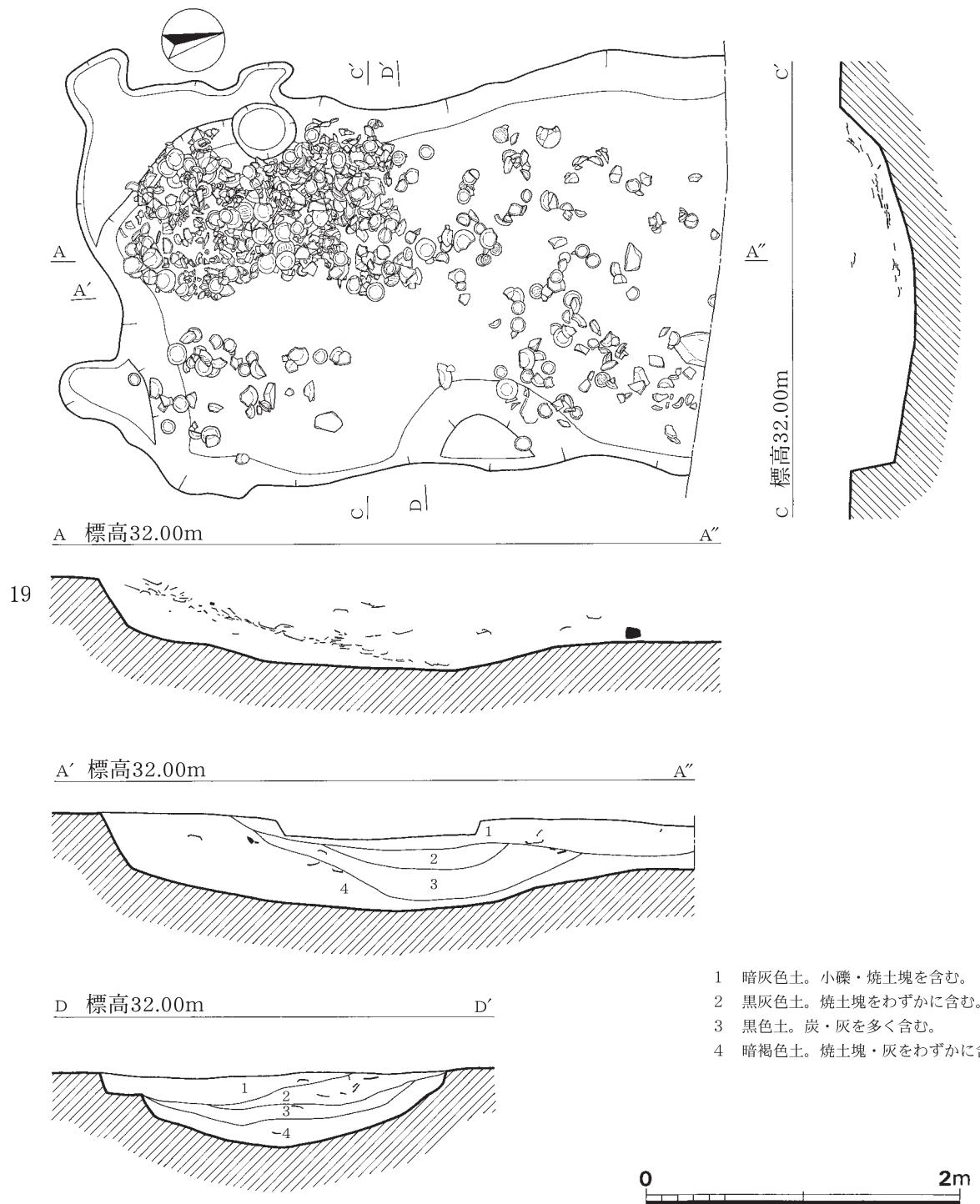
SK290 (第14図、図版4)

調査区南部で検出した土坑である。平面プランは長方形で、北側は調査区外へ延びる。調査区壁までの長軸4.2m、上端幅2.6m、深さ0.6mを測る。遺物が最も多く出土した遺構で、パンコンテナー7箱程度の遺物が出土した。遺物のほとんどは土師器の小皿・壺で、完形品が多く含まれる。また、わずかに輸入陶磁器、鉄製品、銭貨、ウメの種子が出土している。鉄製品は釘の他に、飾り

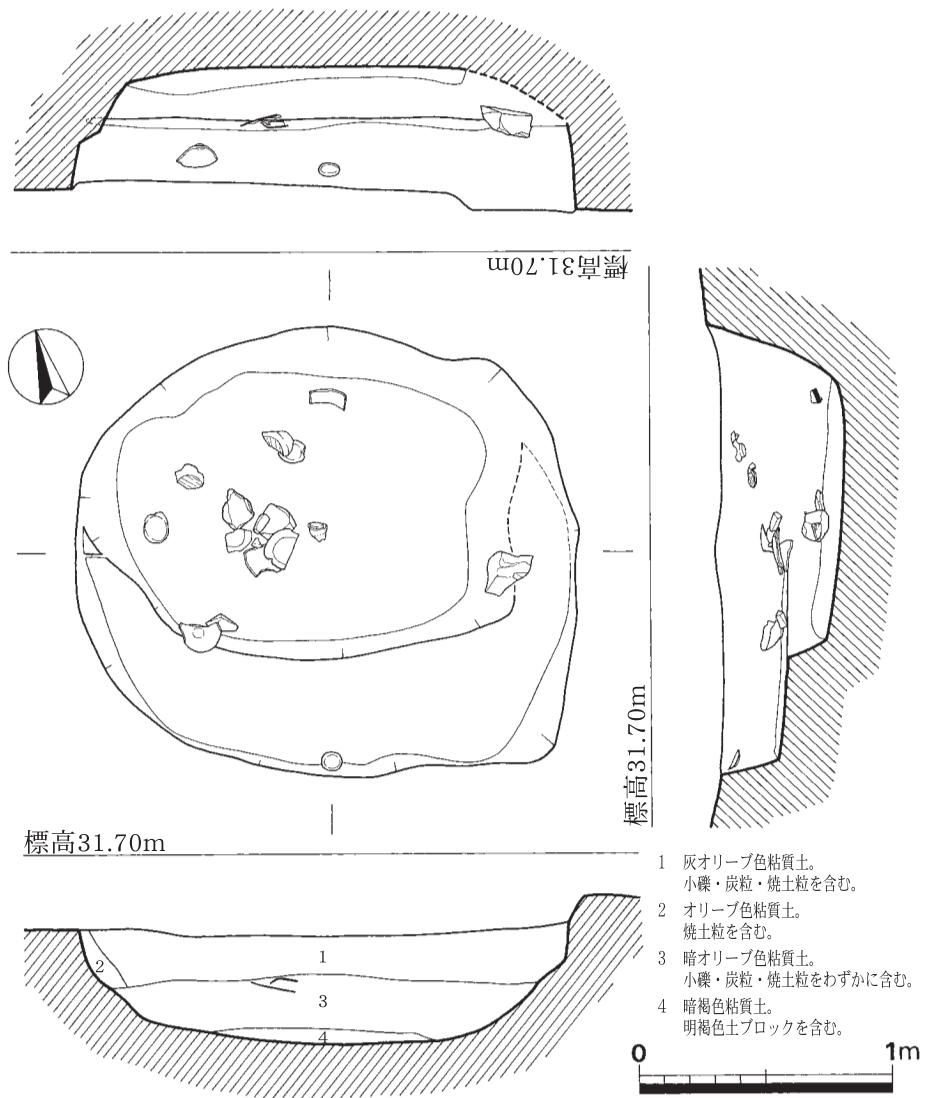


第13図 SK150 実測図 (1/40)

金具のような形状の遺物もみられる。遺物は傾いた状態で、南西側にまとまって出土し、北側と東側での出土は明らかに少ない。埋土には黒色の灰層が厚く堆積しており、ほとんどの遺物はこの層付近から出土した。またこの層には炭化米が含まれていた。一方、遺構の底面付近から遺物はあまり出土していない。遺物の出土状態から、南西側から投棄した廃棄土坑である可能性が高い。床面や壁面に被熱痕跡はみられないため、炭化物や灰なども遺構外から廃棄されたと考えられる。遺構検出時にSK290の周辺から青銅製の磬が出土したが、周辺の遺構検出状況から、SK290の出土



第14図 SK290 実測図 (1/40)



第15図 SK300 実測図 (1/30)

IV. 総括

本調査では、調査区中央部の広い範囲が搅乱を受けていたが、それ以外の部分からは平安時代末から鎌倉時代を主体とする多くの遺構が検出された。主な遺構は、掘立柱建物1棟、溝2条、土坑7基である。SK50・130は長軸3m以上、深さ1m程度の平坦な底面を有する竪穴状の遺構である。このような特徴を持つ遺構は、本調査地南方約100mに位置する安養寺境内遺跡から方形土坑として検出されている。方形土坑は構造上、半地下式の倉庫施設と想定されており、SK50・130も同様の機能を有していたことが想定される。SK100・150・290のような多量の遺物が出土した廃棄土坑や調査地東約50mを通る街道の存在と併せ、当地における消費・流通を探る手がかりとなる。また、五輪塔の部材が出土したSD170や磬が出土したと考えられるSK290の存在から、寺院、特に調査地南側に位置する安養寺(13世紀前半創建)との関わりも想定される。

遺物が未整理であるため今回は概要報告に留め、詳細な検討については次の機会に行う。

遺物である可能性が高い。南方に位置する安養寺との関連が伺われる。

SK300(第15図、図版4)

調査区南西部、SB355の北側で検出した円形の土坑である。断面形状はすり鉢状を呈し、南部分に中段が設けられている。直径1.7~2m、深さ0.6mを測る。SB355との関係は不明である。埋土に焼土や炭粒を含む。遺物は中心付近に集中し、土師器の小皿・壺、瓦器、輸入陶磁器、石鍋などが出土している。

写 真 図 版

図版 1

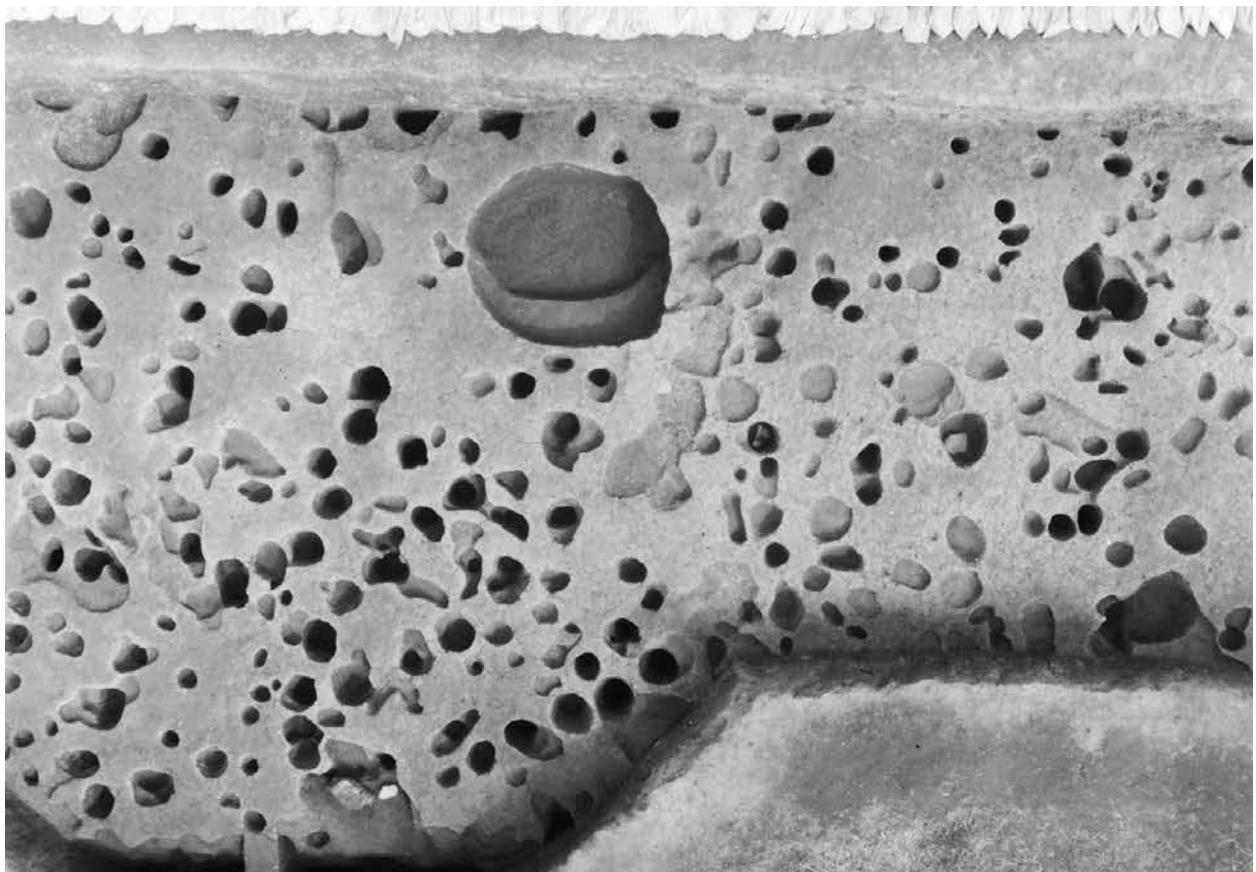


(1) 調査区北部（気球写真、南上空から）



(2) 調査区南部（気球写真、南上空から）

図版2



(1) SB 355 検出状況 (気球写真、南上空から)



(2) SB 355 P-1 碇板検出状況 (北西から)



(3) SB 355 P-2 碇板検出状況 (西から)



(4) SB 355 P-3 碇板検出状況 (北東から)



(5) SB 355 P-4 碇板検出状況 (北東から)

図版3



(1) SD 1 完掘状況（西から）



(2) SD 170 遺物検出状況（東から）



(3) SK 50 完掘状況（南から）



(4) SK 50 土層断面（北西から）



(5) SK 100 遺物出土状況（南から）



(6) SK 100 完掘状況（南西から）



(7) SK 110 完掘状況（西から）



(8) SK 110 土層断面（東から）

図版4



(1) SK130 完掘状況 (西から)



(2) SK130 完掘状況 (北から)



(3) SK150 遺物出土状況 (東から)



(4) SK150 完掘状況 (南西から)



(5) SK290 遺物出土状況 (北から)



(6) SK290 遺物集中部 (北西から)



(7) SK300 遺物出土状況 (北東から)



(8) SK300 完掘状況 (北東から)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	にほんぎいせき だい 30 じはつくつちょうさがいようほうこくしょ						
書 名	二本木遺跡 第 30 次発掘調査概要報告書						
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 344 集						
編著者名	神保公久・西 拓巳・小川原励						
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課						
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町 15 番地 3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp						
発行年月日	2014 (平成 26) 年 3 月 31 日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
にほんぎいせき 二本木遺跡 第 30 次調査	くるめし 久留米市 みいまち 御井町 1612-1 外	40203	030284	33 ° 18 ' 30 "	130 ° 33 ' 13 "	20130722 ～ 20131023	305 m ²	記録保存 調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
二本木遺跡 第 30 次調査	集落	平安 ～ 中世	掘立柱建物 溝 土坑		1 棟 2 条 7 基	土師器、須恵器、瓦器、 輸入陶磁器、鉄製品、 陶器、石鍋		12 世紀～14 世紀の溝 や土坑が検出され、多 量の遺物が出土した。	

要 約

調査地は二本木遺跡の南西部に位置し、標高 31m 前後を測る。検出遺構は掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、土坑 7 基であった。パンコンテナー 30 箱程度の遺物が出土した。本地点の南方 100m に位置する安養寺境内遺跡で検出された大型土坑と同規模の大型土坑 2 基や廃棄土坑 3 基などが検出された。平安末～鎌倉時代前半の高良山西麓における物資の消費、流通を探るうえで注目される。

土木工事の届出日	平成 25 年 4 月 19 日	遺物の発見通知日	平成 25 年 10 月 28 日 (25 文財第 873 号)
----------	------------------	----------	-------------------------------------

二本木遺跡

－第 30 次発掘調査概要報告－

久留米市文化財調査報告書 第 344 集

平成 26 年 3 月 31 日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市市民文化部文化財保護課

印 刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町 410-1